



九条の樹

115号
2026年1月発行

発行：東久留米「九条の会」 連絡先：TEL 042-473-9489（鈴木）
<http://higashikurume-9.net/> メール：higashikurume9j@gmail.com



高市政権の危険性と もうひと・弱さ

第219回臨時国会（25年10月21日～12月17日）において、政権与党の自民・維新が提出した衆院議員定数「自動削減」法案には、なぜ定数1割削減が必要なのか、

法案にはその目的さえない、この1点のみをみても道理がない。新聞各社も「憲政の常道に反する暴論」（読売）、「これほど党利党略を優先した法案も珍しい」（日経）など厳しく批判していました。定数削減の策動は、内容もやり方も民主主義を全くわきまえない邪道そのもので、議員定数削減反対の一点で共同を広げ、通常国会で断念に追い込みましょう。

高市首相は、11月7日の衆院予算委員会で、「台湾が武力攻撃を受けた場合、これは日本の存立危機事態になり得る」と答弁しました。

「存立危機事態になり得る」とは、中国との戦争もあり得る、と言うことになります。日本政府は、1

972年の日中共同声明以降「一つの中国」との原則を尊重し、中国との国交正常化を進めてきました。歴代の首相もこの立場を尊重してきましたが、高市首相が踏み外した答弁を行ったために、日本への渡航自粛などの動きとなつてきました。加えて、高市政権の閣僚は、日本が長射程ミサイルを配備するのも大軍拡も当然だ」という主張を繰り広げていることです。特定の国を敵視することで、排外主義をあたりたて、「危機」と不安をあおりたて、国民の支持を得ようという政治としては最もやつてはならないことをやっています。いま政治の表層だけみると、右翼

的逆流が日本の政治を席巻していくようにみえます。しかし、それは国民多数の願い、世界の動きとの深い矛盾を抱えています。この暮らしの要求と激しくぶつからざるを得ません。

高市政権のもうひと・弱さは、暮らしの面でも明瞭になっています。補正予算は規模ありきで、なかでも軍事費GDP比2%達成ありきで、物価高騰から暮らしを守る政策は空っぽ、アベノミクスの「2番煎じ」で国債頼みの経済政策は円安をもたらし、日本経済を混乱させています。消費税減税は拒否し、最低賃金1500円の目標は投げ捨てる、収入を増やしたければもうと働くと、労働時間規制緩和をさらに進める。米の増産と安定供給も無策で、市場任せ、自治体の「お米券」任せに。医療介護の基礎崩壊は深刻になつていて、根本的解決策はない。暮らしの財源と軍事費の異常突出とはぶつからざるを得ません。

世界にひろがれ 憲法9条

伊藤千尋さんのおはなし ②



てきました。今だつて条約を破っている国は世界中から非難されています。そういう流れを作っていました。その中に九条がある。それが九条の力です。

戦争反対、100年のあゆみ

さてこの百年「戦争をなくす」いう世界の人々の努力が続いてきました。100年前までは強い国が弱い国を攻めて、領土を奪うのが当たり前だったんです。100年前から状況が変わってきました。「戦争をやめようじゃないか」「戦争をしない制度を作ろう」といった機運が盛り上がりつづけてきて1928年フランスのパリに各国の代表

が集まって「パリ不戦条約」を作った。これがきっかけになり第2次大戦後、国連ができ、国連憲章第2章で「加盟国は武力による威嚇または武力の行使を控えなければならない」どこかで聞いた文句です。これが憲法九条のもとです。九条のもとは国連憲章、そのもとは「戦争をなくそう」という人類百年の夢があるのです。日本国憲法九条はそれが結実した人類初のものです。そのあとも1975年生じ物兵器禁止条約、対人地雷禁止条約、そして核兵器禁止条約が決まりました。もちろん条約ができたからと言つてすぐそのおりになるわけではなく、条約を破る国があります。しかし破るような国はほんのわずかです。多くの国は条約に従つて戦争をなくそうという流れを作つ

てきました。今だつて条約を破っている国は世界中から非難されています。そういう流れを作っていました。その中に九条の国は戦争をなくすのにどうしたらしいか悩んでいます。簡単談じやない。日本人はそういう発想はしない。原爆そのものがいかん。戦争そのものをやめよう。日本人の多くはそう考えてゐるよ。」といふとびっくりします。世界はまだ「やられたらやり返せ。原爆落とされたら落とし返せ。」そういう発想でいますよ。だからウクライナへの侵略有ありガザでの虐殺あるんですね。われわれは戦争そのものをやめよう、核兵器そのものをなくすというものが日本の方の世論じやないです。なんで日本

九条の発案は日本人

「九条はマッカーサーに押し付けられた」という人がたくさんいます。違いますよ。戦後の首相、幣原喜重郎この人のアイデアです。証拠は国会図書館にあります。スマホでも、見られます。「こういうふうに憲法九条を考え付いた」「原子爆弾ができた以上世界は根本的に

憲法九条ができる、それによつて戦争というものを起こさうと思いませんでした。よその国の人にだれ一人殺さなかつたし、日本人も殺されていない。そうして回りましたが、どこでも言われたことが「日本はアメリカから原爆を落とされたよね。今度は日本がアメリカに原爆落とす番だよね。」というのです。「冗談じやない。日本人はそういう発想はいい。九条を世界に広げるのが私たちの役割です。



幣原喜重郎

(しではら・きじゅうろう)

変わった。戦争を起きたためには武器を持たないことが一番の保証になる。軍縮を可能にする方法は一つ。世界が一齊に軍備を廃止することである。ここまで考えたとき憲法九条が浮かんだ。今こそ平和のために立つときではないか。僕は天命を授かったような気がした。憲法で非武装宣言する、ということは従来の観念からすれば狂気の沙汰である。だが正氣とは何か。武装宣言が正気の沙汰か。……憲法は押し付けられた形をとつた。当時の実情として実際にできることではなかつた。」

これはどういうことかといふと、幣原さんは平和的開明的な人だからこういうアイデアを思ふ。幣原さんは平和放棄国の出現を期待する以外ない。日本はいまその役割を果たしうる位置にある。

い付いたのです。ほかの政治家はコチコチの明治憲法の政治家で、憲法の起草委員たちはそういう人たちでした。幣原首相は起草委員に入つていませんでした。彼らではこれを受け入れない。それでマッカーサーに直接提案して、命令として出してもらおう、と考えたのです。「（マッカーサー）元帥と長い時間話し合つた。そこですべて決ました。」1946年1月24日のことです。幣原はマッカーサーと3時間話し合つたのです。「マッカーサーは驚いていた。軍人である彼がすぐ賛成すまいと思つてゐたので、最初にそう言つたが、懸命な元帥は最後に非常に感激した面持ちで握手を求めてきた。」マッカーサーは最後にまためらつたが幣原は「好むと好まざるとにかかわらず世界は一つの世界に進まざるを得ない。軍縮を可能にする突破口は、自發的戦争放棄国の出現を期待する以外ない。日本はいまその役割を果たしうる位置にある。

歴史の偶然はたまたま日本に世界史的任務を受け持つ機会を与えた。あなたさえ賛成するなら、日本の戦争放棄は承認される可能性がある。歴史の偶然を今こそ利用するときである。日本を自主的に行動させることができ、世界を救うただ一つの道ではないか。」こういうことを言いました。このまま軍拡競争をやつたら世界戦争になりますよ。アメリカも滅びますよ。そうならないために日本は軍隊をなくします。

マッカーサーの証言

マッカーサーが1951年5月のアメリカ議会上院で証言しています。「日本国民は世界中のどの国民より原子戦争がどんなものであるか理解している。彼らは彼ら自身の発意で、戦争を禁止することを憲法に書き込んだけれど、幣原首相は私のところにやつて来て『この問題を解決する道はただ一つ戦争をなくすことだ。私は今起草している憲法

の中に、このような規定を入れたい』といった。私は彼と握手しながら、これこそ最大の建設的な歩みだと言わないでいられなかつた。」幣原の証言とマッカーサーの証言とぴたり一致しているでしょう。こうしてみると誰が九条を考え付いたかよく分かります。

ではなぜそのままアメリカの押し付けと言われ続けたか理由があります。憲法は1951年の5月ですけど、直前その年の3月に幣原は病氣で亡くなっています。それ以来幣原の肉声の証言が取れない。それをいいことに自民党は押し付けだということばかり言いふらしてきました。幣原のアイデアなどを知らせないままに、憲法全体がアメリカの押し付けだと、我々の頭に刷り込まれてきたのです。

つづく

（文責事務局
幣原はパリ平和会議に外相として参加、井上ひさしが戯曲化しています）

戦争体験記

戦争の中の少女たち

多島 優子

終戦記念日が近づくと、あの夏の日々が思い出される。

当時私の住む北陸の小都市にB29の編隊が襲撃するようになり、隣接県の福井市、富山市にも焼夷弾が投下され、市街の半が全滅した。あの空襲の夜、頭上を通過する爆音と六十糠も遠い街のオレンジ色の空は戦争の実感として今も心に残っている唯一のものである。

私は十五歳だった。沖縄の玉碎が伝えられ、本土決戦の噂が流れる頃、私の通学していた女学校も軍の命令で軍需工場と化した。体操場、教室などが作業場となり、戦闘機の給油タンクを作った。上級生は竹を薄く剥ぐ作業がほとんどだった。下級生は針金を編んでロープを作ったり、は

んだけの作業であった。何れも熟練を必要とし、私たちは切り傷、火傷を負いながら黙々と従事した。出来上がったタンクは、特別攻撃隊の若き命と共に南の海に消えたのであろうか……。

毎月八日は大詔奉戴日で、勤労奉仕をすることになつていた。軍馬の干し草刈りをしたり、松の伐採に七糠の道を往復した。松根油といって、根から戦闘機の年露湯が得られるということが、これらの作業の折にも防空頭巾、紋急袋を携帯する習慣になつていた。

進め一億火の玉だ！鬼畜米英殲滅！の標語が貼られ、町の広場では婦人会の人たちの銃剣の訓練が毎夜続いた。敵の落下傘部隊に、女が竹製の銃剣で立ち向かう等、正気の沙汰と思えない軍の命令が多くた。

夏も終わり、日華事変から第二次世界大戦と、十年にわたる戦争から解放された私たちの心は、長いトンネルを抜けて青春の陽の中へ一斉に飛び立つた。もんぺ姿からセーラー服になり、物資はなくとも私たちの心は明るかつた。過去で最も開放感を味わつたのも、この時だつたと思う。

『平和を考える本』
（寺地はるな作／実業之日本社）

『力レーの時間』
（寺地はるな作／実業之日本社）

3人の娘や孫からも疎まれるがさつな昭和男の祖父・義景と、唯一の男孫である令和男の桐矢が一緒に住むことになった。

義景にはこれまでに、娘たちには言えない、言う必要もないと思つてきた事がたくさんあった。戦後の混乱期、家族もなく満足に食べることもできなかつた少年時代を生きて、弱さを感じたら最後、自分が崩壊してしまうとかたく信じていた。

一方、繊細な感情や言葉遣いやマナーを必要とする令和の人間もまた、義景を理解できないままに過ごしてきただけ……。祖父と孫との暮らしの中で、カレーをキーワードに、過去と現代が急速に近づいてゆく。